

半教半学―慶應義塾の伝統

岡部研究会のみなさん。

慶應義塾には「半学半教」という伝統といつか、ひとつのモットーがあります。

これは、ひと言で言えば「学生にして教師を兼ねる」という考え方です。昨日の送別会でも、四年生の諸君が「一年ないし二年以上級の研究会先輩から実に多くの様々なこと（研究論文の書き方ほか）を学んだ」と述懐していました。まさにこれです。

四生（そして三年生）の諸君は、その伝統を下級生（二年生、三年生）に伝達されたわけであり、うれしく思います。そのおかげもあって、二年生のタームペーパーは全体として見事なできばえでした。この点で、皆さんが自由に利用している共同研究室の存在は、お互いに励ましあうことのできる空間として大きな意味があったことでしょう。

半教半学という教育形態は、もともと江戸時代から明治初年にかけて、経営基盤の弱い民間の私塾において費用節約のために発生した制度です。しかし、慶應義塾でこの仕組みを重視していることの根底には、学問は上達すればするほど奥深くなり、それを究めることは一層むずかしくなるので、学問の完成は永遠の課題である、という思想が込められています（『慶應義塾豆百科』）。

これと同様の考え方は、プリンストン大学など米国の優れた大学でもみられます。同大学では「大学において最も大切な学生（student）は教員（faculty）自身であり、もし教員が学び続けていなければ、そして成長し続けていなければ誰も学び成長することはできない」という考え方が多くの教員によって表明されています。私もその精神で引き続き精進しているつもりです。

新学期から四年生になる諸君も、半教半学という伝統を継承して下級生と一緒に頑張って勉強されるよう期待しています。

（岡部研究会の学生あて電子メール、二〇〇六年一月三〇日）